令和元年度とやま呉西圏域調査研究事業

「とやま呉西圏域における『とやま文化』の再定義と
デザイン・ドリブン・イノベーションの実践的調査研究」

報　告　書

富　山　短　期　大　学
篠田　隆行・東野　善男

目次

１．はじめに……1

２．研究内容

２．１　背景……2
２．２　研究の目的……3
２．３　研究の枠組み……3
２．４　研究の方法……4
２．４．１　アンケート調査……4
２．４．２　ワークショップの実施……5
２．４．３　事例検証……5

３．研究結果

３．１　アンケート調査の結果……7
３．２　ワークショップ実施結果……13
３．３　事例検証結果……16

４．まとめ（提言）

４．１　図書館員への提言……21
４．２　司書は図書館資料の番人か……22
４．３　高等教育機関と組むことで活性化する……23
４．４　最後に……23

とやま呉西圏域における「とやま文化」の再定義と
デザイン・ドリブン・イノベーションの実践的調査研究

篠田　隆行　・　東野　善男（富山短期大学）

1．　はじめに

持続可能な社会構築のために、SDGｓを基軸として様々な施策が実践されている。富山県内でも、富山市に続き南砺市がSDGｓ未来都市に選定され、その施策構築に向けて様々な取組が実践されている。エネルギー問題を中心とした再生可能な資源を利活用することが数多く研究されているが、本研究では、地域社会において長く公共施設として存在している公共図書館をその資源と捉え、そこから導き出されるソーシャルデザインの構築を検討した。そもそも、ソーシャルデザインとは、人間が生活する社会環境の課題をデザイン課題として設定し、それを解決しようとするものであり、その起点は特定のモノではなく社会である。すなわち、人と人との関係、そしてそれらを取り巻く環境なのである（内田・本山・井上、2018）。このような観点で捉えた場合、公共図書館は地域社会において本や資料を媒体とし、地域住民が自由に行き交うことのできる「場」であり、まさにソーシャルデザインを構築するうえで最適な施設であるといえよう。また、ソーシャルデザインの目的は、その地域で暮らす人々が持つ信頼関係や人間関係（＝ソーシャル・キャピタル）を増やすことにあり、増幅された社会的ネットワークを原資に地域力を高め、社会的課題に取り組むことであり（平野・須永、2016）、地域の公共図書館はその機能という観点からもソーシャルデザインを構築する有用な資源と捉えることができるのである。

本研究は、富山県において長年培われてきた「富山の薬売り」というビジネスモデルが現代の経営学におけるPSS（Product-Service-System）という分野との類似性に着目し、その応用発展の可能性を「デザイン経営」という観点からアプローチし、とやま呉西圏域の地域課題の解決や経済的成長の牽引となる施策のモデル提唱へ繋げることを目的として、実証的な調査研究を行ったものである。

具体的には、とやま呉西圏域に存在する多様な公共施設の再編において「意味のイノベーション」を付加することで発展的かつ長期的な資産の構築へと結びつける可能性を探った。例えば、大学・短大生等の若年層を対象として、デザインという新たな価値創造を再認識するための調査分析を行い、有効な施策提案を行うとともに、実質的に若年層が企画に参画する提案に結び付けることを計画し、イノベーションの創出を図った。事例としては、公共図

書館を軸に知的生産拠点となる博物館や美術館の施設の活用法についてデザイン的観点における調査を実施し、有効な施策を検討した。公共図書館に着目した理由は、少子高齢化が加速し、地域活性化が重要な課題であるなか、企業誘致や移住促進、あるいは起業促進等の様々な施策がなされてきたが、必ずしも爆発的な成果に繋がっているとは言い難い状況である。そこで、近年では文部科学省（2006）にも示されているように全国的に地域活性化の拠点として、図書館や博物館といった公共文化施設の存在が改めて注目されているからである。

2.　研究内容

2.1　背景

国家レベルの政策に着眼すると、経済産業省より平成30年に「デザイン経営」宣言がされ、従来の大量生産型社会から脱却し、新たな価値創造というイノベーション経営の重要性が提示されており、これは単に企業経営のみならず、自治体におけるイノベーションを促す意味でも大きな施策といえるものである。

また、同年、県の政策として「新世紀とやま文化振興計画」が改定され、新たな文化施策計画が提示された。このなかでは、富山県において伝承されている多様な文化に対しての維持・発展ならびに発信の在り方について述べられている。全国レベルで捉えても、富山県の文化振興に対する施策は先進的な事象が実施されているのが実態である。

このような社会的政策提示がされる一方で、その先駆的な取組が富山県内の大学・短大生を中心とする若年層が俯瞰的な視点において十分に認識されているかという点では疑義が残るという現状がある。

富山県の呉西圏域には、各々に優れた文化的公共施設が存在するにも関わらず、若年層による活発な利用が見込まれていない現状を捉え、あらためて、自らが生活する地域の文化を学ぶべく意義を再認識することを促し、地域の持続可能性を担保すべく、若年層を中心とした市民による参画的なイノベーションが必須であることが喫緊の課題である。

一方で現実的な問題に視点を転ずれば、人口減少に伴う地域経済の地盤沈下が否めない現状において、起爆剤となるような施策がないのも事実である。そこで有効となるのが既述した「意味のイノベーション」である。「意味のイノベーション」とは、イタリアの経営学者・ベルガンティが提唱するものであり、今までにないビジョンの創造が関心の対象となり、イノベーションのレベルを一段押し上げることである。新たな「どのように」だけでなく、新たな「なぜ（Why）」を追求し、人々がモノを使用するための新しい理由を提案するものである。つまり、新たな価値創造であり、意味のある解釈であり、新たな方向性を示すことであり、本研究では、公共図書館にこそこの「意味のイノベーション」を適用すべきと考え、調査研究を実施したものである。

2.2　研究の目的

富山県内の公共図書館は分館を含め県内に54施設あるが、とくに呉西圏域とされる県の西部に位置する６市（射水市、高岡市、氷見市、砺波市、南砺市、小矢部市、以下呉西圏域という）の公共図書館はその機能の集約化と再編の過程にある。筧（2019）によれば、持続可能な地域を構築するためには、一過性のイベントやハコモノ頼みの施策ではなく、長期的かつ住民主体の地域づくりでなければならないと述べている。本研究においても、富山県呉西圏域の公共図書館が新しく再編・開館されるのを機に、その機能を改めて検討し、公共施設としてのイノベーション創造の可能性を提示することが目的である。そして、公共文化施設としての図書館が、地域における経済的な便益のみならず、地域住民の生活を豊かにし、精神的な便益、すなわち、幸福感を高めるためにはどのような変革、ならびに維持すべき機能があるかを明らかにすることを目的とする。

2.3　研究の枠組み

以上の目的から本研究は、①アンケートによる実態調査、②ワークショップ実施によるデザイン・ドリブン・イノベーションの実践、③地域活性化策としての公共図書館の取組事例の検証という３つの要素を構成し、そこから得られる知見より、富山県呉西圏域における公共図書館の課題を洗い出し、実現可能性を踏まえた提言の策定を図る。

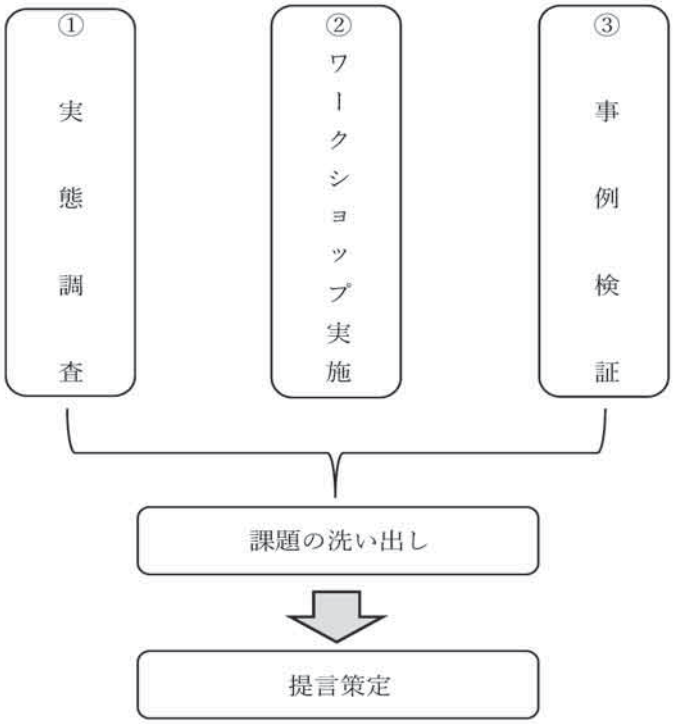


図１　研究の枠組み

2.4　研究の方法

図１に示した枠組みに則り、①実態調査、②ワークショップ実施、③実態調査について下記のとおりの方法により実施した。

2.4.1　アンケート調査

調査の概要は以下のとおりである。

調査対象	：	富山県住民（富山短期大学学生、富山県立高岡工芸高等学校、他）
調査方法	：	紙配布による記入方式
調査期間	：	令和元年10月1日～31日までの１カ月間
回収状況	：	653

・質問内容

質問内容には、回答者の属性の他、友人数、日常の移動手段、情報の入手方法、地域に対する認識・感情、公共図書館の利用頻度、読書数、フリーワードの 11 項目を設定し、実施した。本アンケートは、今後の地域社会の中心を担う若者の実態を把握することも兼ねている。各項目設定の意図については表１のとおりである。

表１　質問項目の設計趣旨

質問項目	趣旨
友人数	スマートフォンの普及、大学生のサークル活動の減少等が問題視されるなか、日常の生活において共に活動する人数の実態を調査し、読書量との相関について調査するため。
日常の移動手段	地域活性を図るための、人の移動手段は地方においては最も重要な対象であるため。
情報の入手方法	読解力・読書量の低下の原因として、スマートフォンの影響があるなか、情報の入手をどのようにしているかを調査するため。
地域に対する認識・感情	地域活性化の中心となる市民感情（シビック・プライド）の把握のため。
公共図書館の利用頻度	本研究の中心的テーマである公共図書館の利用頻度の実態を把握するため。
読書数	公共図書館を中心とした地域活性化を図るための前提条件としての読書量を把握するため。
フリーワード	「とやま文化」の再定義を図るため、フリーワードを設定し、「富山の文化」について思い浮かぶものの記述。

2.4.2　ワークショップの実施

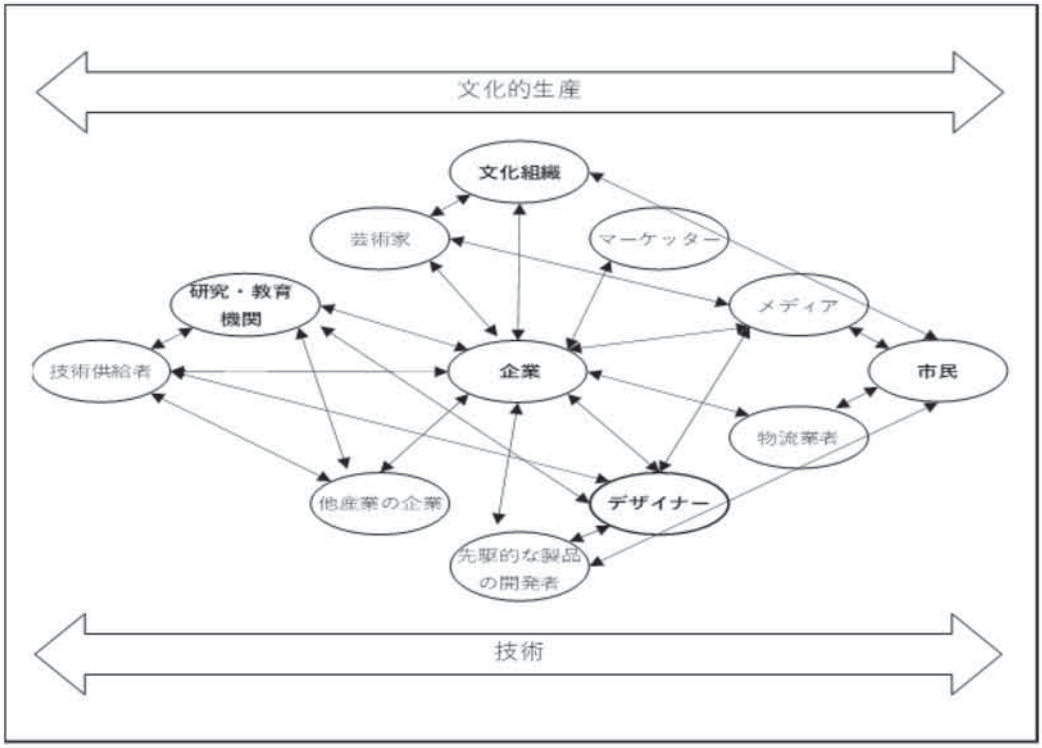


図２　デザイン・ディスコース　出典：Verganti 2009

ベルガンティは、デザイン・ドリブン・イノベーションとは、製品の特徴ではなく意味を考え、改良ではなく革新的な変化を探求し、既存のニーズを満足させるのではなくビジョンを提案することでイノベーションを追求すること、と定義づけている。図２は、このイノベーションを生み出すために構成すべきネットワークをデザイン・ディスコースとして表したものである。つまり、イノベーションを生み出す企業は、短期的な収益の確保のみを目指した利己的な行動ではなく、様々な分野に属する人と協働することにより、長期的で持続的なイノベーションを追求することができるのである。

本研究においても、この形式を倣い、公共図書館におけるイノベーションの追求の可能性をワークショップという形式で実践した。

2.4.3　事例検証

本研究では、ソーシャルデザインにおける公共図書館の有用性を検証することから、呉西圏域外の事例を参考とし、呉西圏域における実現可能性を高めることを目的とする。そこで、他の地域（海外を含む）における事例等を文献調査、あるいは実地調査を行い、呉西圏域における実現可能性や比較検証を行う。

・調査の方法

今回の実地調査は、イベント出展者からの聞き取り調査を軸に実施した。事前準備として，実地調査の企画を東野が、横浜ではワークショップ参加予定の学生（いずれも富山短期大学）

５名が聞き取りを行い、幕張実地調査を篠田と東野２名が行った。

①第１回実地調査：第 20 回図書館総合展（2019 年 11 月 12 日～14 日、パシフィコ横浜）

本実地調査は，会期中の 2019 年 11 月 12 日～13 日の期日で行った。

実地調査の対象としたのは、「株式会社カーリル」「株式会社中日新聞社」「図書館とゲーム部」「ビジネス支援図書館推進協議会」「本のヒーロー　ダクシオン」等であった。

②第２回実地調査：第 3 回地方創生ＥＸＰＯ（2020 年 2 月 5 日～7 日、幕張メッセ）

本実地調査は，会期中の 2020 年 2 月 5 日～6 日の期日で行った。

実地調査の対象としたのは、「株式会社メディアドゥ」「（公財）文字・活字文化推進機構」「株式会社モリサワ」「株式会社トーハン」「図書館と地域を結ぶ協議会」等であった。

また、文献調査は、スーザン・オーリアン『炎の中の図書館　110 万冊を焼いた大火』（2019 早川書房）を中心に、その他は参考文献に記述している。

以上の３つの調査・実践を包括し、そこから得られる結果と知見を分析し、最終的にまとめ（提言）ならびに今後の課題を本報告書にまとめた。

3.　結果

3.1　アンケート調査結果

アンケートの実施にあたっては、公共図書館の新たな価値創造を図るべく、利用の頻度を問わず、若年層を中心とした調査を試み、500 件以上の回答を目標としたが、結果としてそれを上回るデータの収集ができた。

3.1.1　回答者の属性

表２　回答者の性別

男性	212人	32.5%
女性	441人	67.5%
合計	653人	100%

表３　回答者の年齢

～18歳未満	253人	38.7%
18～24歳	371人	56.8%
25～29歳	0人	0%
30～34歳	1人	0.2%
35～39歳	2人	0.3%
40～44歳	6人	0.9%
45～49歳	5人	0.8%
50～54歳	4人	0.6%
55～59歳	2人	0.3%
60歳以上	9人	1.40%
合計	653人	100%

表４　回答者の身分

高校生	202人	30.9%
短大・専門学校・高専・大学生	416人	63.7%
社会人	35人	5.4%
合計	653人	100%

3.1.2　情報入手方法

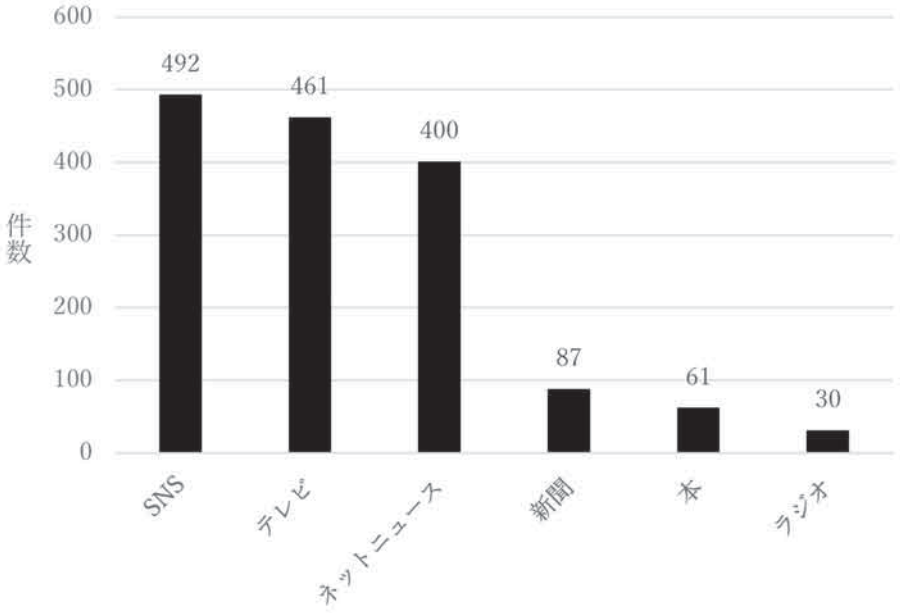


図３　情報の入手方法

図３は、情報の入手方法についての調査結果である。複数回答での回答としたが、SNS での入手が多いことがわかる。質問項目では、「情報」としか表現しておらず、その範囲をどの程度で解釈するかは流動的であるが、少なくとも入手方法が SNS に大きく依存していることがわかる。

また、情報の信憑性等に関する認識については明らかではないが、現代の若者がテレビによる情報よりも SNS による情報入手が多いことが改めてわかる。

本研究では、このような実態を踏まえ、ソーシャルデザインを構築するうえで、地域の情報の重要性を鑑み、SNS の有効な活用方法と情報リソースの信憑性が大きく影響することから、ワークショップでは新聞社をはじめとするメディア関係者の参加を促したが実現しなかったことは課題として残る点である。

つまり、ソーシャルデザインの構築において、市民が地域づくりに参画するなかで、認識の共有は重要な観点であり、その点においてメディアは重要な役割を果たす。SNS 等による個人の主張が容易になる現代において、その認識の集約化には既存のメディアが築いてきた信頼が新たな形で活用できることから、今後は、地域の課題解決という観点から、既存メディアの新たな取組を期待するとともに、研究者としても協働して新たな枠組みを構築したいと考える。なお、全国的には福岡の西日本新聞が「あなたの特命取材班」という形で、新たな取組として地域づくりへの参画を実践していることは大いに参考となるため補足しておく。

3.1.3　地域（富山県）に対する認識・感情

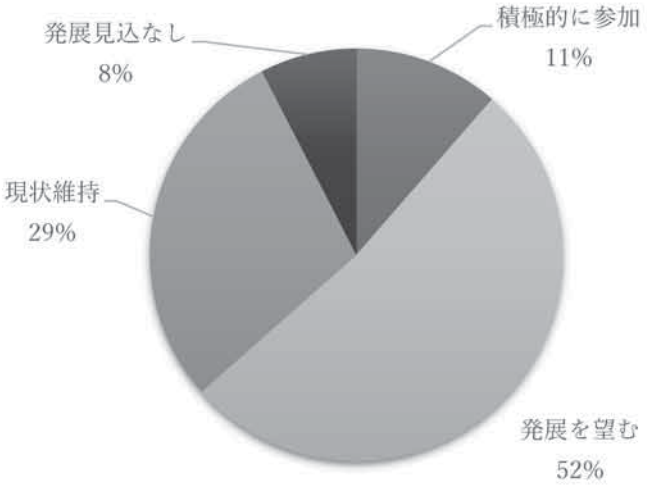


図４　地域に対する認識・感情の割合

図４は、地域活性化の前提となる市民感情（シビック・プライド）を調査した結果である。本調査の回答者は 95%が 24 歳以下であることから、今後の地域づくりを検討するうえで、重要な要素といえる。

具体的には、発展を望む（52%）という層に注目する。今後も地域住民として自発的な行動を伴わないのであれば問題である。市民は決して消費者ではない。「公共」は行政だけが担うものではなく、住民もまた担わなければならない。長野県下條村が取り組む「共助の精神」はその好例であろう。当事者意識がないとすれば、それこそ 8%が回答したように発展の見込みが無い。一方で、高等教育機関には、地域で貢献するあるいは貢献する意志を持つ人材を教育する大きな責任がある。また、図書館においては、地域探求をすすめ、見える化することで、「住む地域には何も無い」という誤解を解くきっかけになるかも知れない。一般的に人は、当たり前に身の回りにあるものには気づかないものである。

一般的には、「若いうちは地域の良さについての認識は低く、一定の社会経験を積んでから、改めて自らの地元の良さを感じるものである」という認識がもたれていることだろう。しかし、人口減少の流れが加速するなかで、地域の維持を検討するのであれば、この現状を問題視すべきであろう。つまり、若年層が自ら参画して地域を活性化しようとする意志が低く、積極的に参加しようとする割合が 11%では地域活性化は厳しいと言わざるを得ないことに加え、教育機関の責務も大きく影響するものと考える。

本調査は、定点的な限定されたデータである点は否めないが、一定数の回答から算出されたものであり、前提認識をするうえでは参考となる。今後は、継続して調査対象を拡大することも視野に入れ実施することにより、その変遷を明らかにすることが、地域課題の解決、ならびに地域発展には必須であると考える。

3.1.4　公共図書館の利用頻度

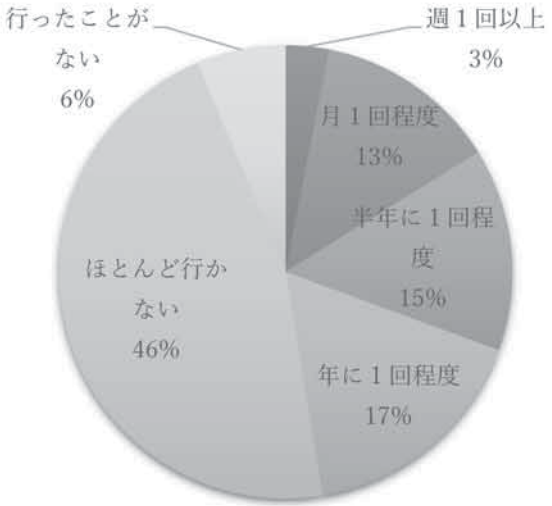


図５　公共図書館の利用頻度割合

図５は、本研究の主要目的である公共図書館について、その利用頻度を調査したものである。先行研究では、岡安（2019）が滋賀県の米原市立図書館での利用状況について論じたものがあるが、本研究はこれ以上のサンプル数を得た結果となっている。

具体的には、行ったことがない（6%）＋ほとんど行かない（46%）＋年に１回程度（17%）の合計 69%は、「利用に消極的」とみなせる層である。この層のためには、運営側に試行錯誤が求められる。具体策としては、若者世代との相性が良いアイテムのうち、図書館と親和性が高く、効果的と思われるものを活用すればよい。例えばアナログゲーム・デジタルゲームなどが挙げられる。図書館でなくても、すでに射水市の情報発信で採用されているＶチューバー（バーチャル YouTuber）はその視点を取り入れているのではないだろうか。（後述するが、実際にワークショップにおける学生からの提案事項としても発案されている。）

次に、月１回程度（13%）＋半年に１回程度（15%）の合計 28%は、まさに「利用者」層である。現状でも満足感は高いと思われるが、定期的な変化も提供したいところである。具対策としては、その世代に応じたテーマ展示（アニメ、まんが、ゲームと言ったサブカルチャーや有名タレント、音楽など）やこれまでの自習室を越えたコワーキングスペースの設置や読みたくなる電子書籍や電子マガジンの導入が考えられる。いずれにしても図書館総合展や地方創生ＥＸＰＯなどのイベント会場にはヒントが満載であり、情報収集のためにも図書館員は積極的に訪れるようにするべきである。

なお、公共図書館員の人的課題として、指定管理者制度が大きく影響していることは十分認識しているが、本稿では研究課題としては逸れるため触れないこととするが、先行研究では、桑原（2018）、松村（2018）、佐藤（2019）などが様々な観点から分析している。

3.1.5　読書量について

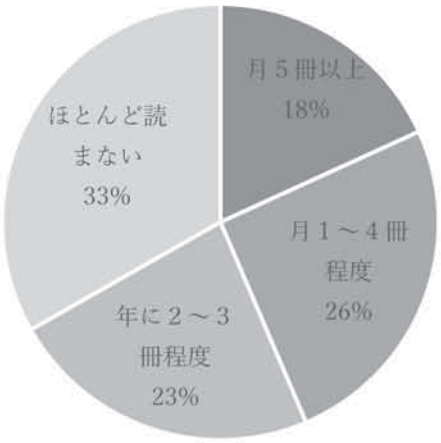


図６　読書量の割合

全国大学生活協同組合連合会が 2018 年に実施した第 54 回学生生活実態調査によれば、全国の大学生の読書時間は 48%が１日の読書時間が０分となっている。2018 年度の結果はそれまでの上昇傾向からは歯止めのかかる数値（2017 年度は 53.1%）となったが、以前半数近くの学生が全く読書をしない状況である。このような全国的な傾向のなか、本研究では富山県呉西圏域の学生の読書量について調査を実施した。

調査結果である図６から読み取れることは以下のとおりである。

月５冊以上（18%）＋月１～４冊以上（26%）の合計 44%は、まさに「読者」層である。前述の「利用者」層と重ならない理由として次の２点が考えられる。

①本は別の手段で準備している。例えば書店で購入する。

②図書館は利用するが、目的は読書に限らない。例えば自習や調べものをしている。

より深い調査によっては、前述の対応策に条件を加味しながら進められるであろう。

ほとんど読まない（33%）という「不読者」層について、一定数は高等教育機関に進学するあるいはしている者も含む。当然ながら教員の役割は大きい。学生が本に近づく（必ずしも読書を意味しない）きっかけ作りとして、図書館を含む地域とのコラボレーションが効果的な教育方法であると確信している。

以上のとおりであるが、全国的な大学生の動向と比較すると本調査対象の富山県の学生は読書については高い傾向にあることも読み取れる。この傾向を維持・尊重し、読書の意義を改めて再認識し、地域全体で図書館を起点とした特筆した取組を実施する可能性を有していることはわかり、ぜひ長所として捉えるべきであろう。

3.1.6　とやま文化の再定義

県は、平成30年に「新世紀とやま文化振興計画」を改定版として公表し、2026年度を目標年度とする計画を発表している。この計画では、「文化活動への幅広い県民の参加」「質の高い文化の創造と世界への発信」「文化と他分野の連携」を柱として、表５のような様々な重点施策が選定されている。

そこで、本研究ではアンケートにおいて富山の文化について連想する言葉を調査し、表６のように分類した。

表５　「新世紀とやま文化振興計画」抜粋

分類	施策の方向性
文化活動への幅広い県民の参加	身近なところで優れた文化を鑑賞する機会の充実 文化の創造への支援 文化を通じた交流・文化活動への参加の拡大 次世代を担う子どもたち、青少年の文化活動の充実
質の高い文化の創造と世界への発信	アジアを代表する舞台芸術の拠点づくり 特色ある国際的な文化振興事業の展開と発信 ふるさとの歴史・文化の再発見と発信 情報通信等技術を活用した文化の創造と発信
文化と他分野の連携	文化振興と観光振興 文化を活かしたまちづくり・地域づくり 豊かな食の磨き上げとブランドイメージの向上 文化力を活かした産業の進行

表６　「とやま文化」で連想する言葉

分類	キーワード	データ数	割合
食文化	魚、ますのすし、白エビ、ほたるいか、寒ブリ、富富富、昆布、他	270	34.5%
祭り	おわら、曳山、山王祭り、こきりこ、御車山祭り、他	211	26.2%
自然	海、合掌造り、水、立山、蜃気楼	99	12.3%
薬	売薬、薬膳、他	74	9.2%
伝統工芸	彫刻、ものづくり、和紙、鋳物、他	71	8.8%
その他	万葉集、チューリップ、獅子舞、方言、仏像、ガラス、黒部ダム、他	81	10.0%

表６から注目すべき点は、県として様々な文化振興策が実施されているなかで、「ふるさとの歴史・文化の再発見と発信」に分類されている「祭り」が高い数値を示していることである。

3.2　ワークショップ実施結果

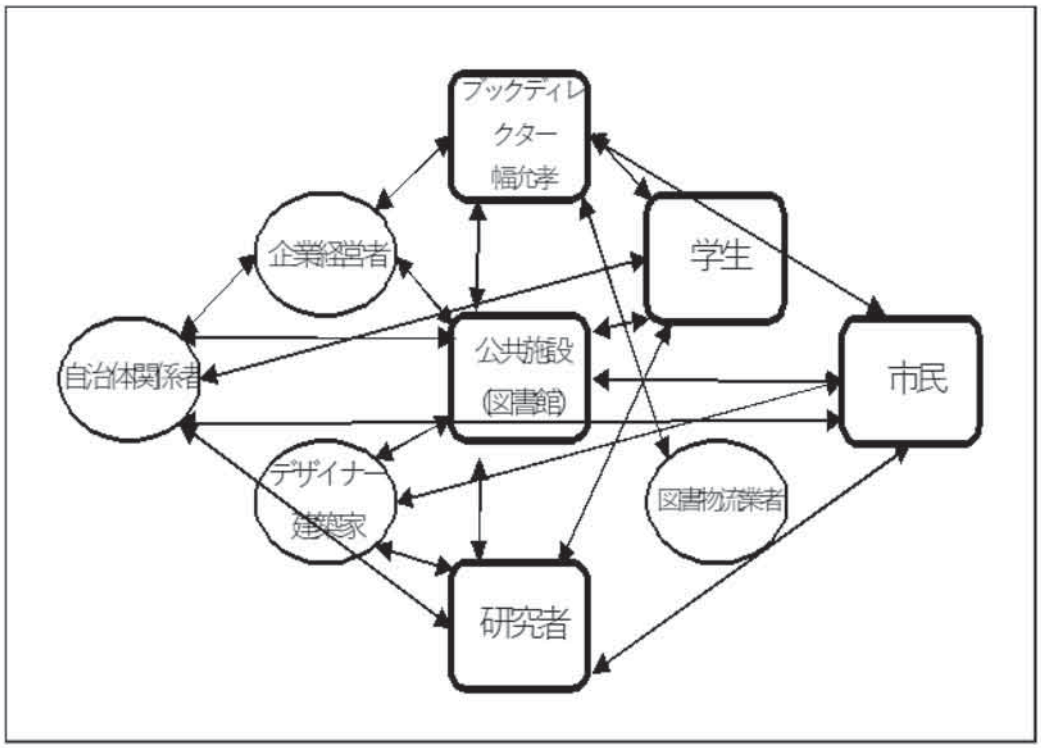


図７　本研究における実践したデザイン・ディスコースの概念図

ワークショップは、ベルガンティが提示するデザイン・ディスコース（図２）にならい、図７のような関係図が構築できるように人選した。

実際には、図７の中央に該当する「公共施設」（図書館）に勤務する方の 10 名を中心とし、デザイナー２名、企業経営者１名、美術館勤務者１名、古書店経営者２名、メディア編集者１名、公認会計士１名、地域活動家１名、新聞社 OB１名の計 10 名と各方面にわたる方々に参加いただき、ワークショップにおけるグループのオブザーバーとして意見を述べていただいた。各グループは、富山短期大学・経営情報学科の学生 52 名が４人ずつに分かれ、公共施設の図書館について議論を実施した。

オブザーバー役として参加していただいた方々からは、普段から連携や関係構築を望んでいた（例：公共図書館と書店経営者、あるいは公共美術館と公共図書館等）が、実現できずにいた点や、学生との接点、あるいは日常はあまり考えてこなかった公共図書館について再考する機会となった旨の意見もいただいた。

第一部：幅允孝氏による講演

第一部では、全国的に著名で、本を通じた数多くの取組を実践されているブックディレクターの幅允孝氏に、「本とデザインとまちづくり」というテーマで講演をしていただいた。

講演の中では、幅氏が事業として手掛けた札幌市図書・情報館での事例や、城崎温泉（兵庫県豊岡市）での本を通じた地域活性化の事例についてお話しいただいた。

また、幅氏が業としているブックディレクターとしての内容を講演していただき、読書の効用や、読書の推進を図るうえでの工夫、あるいは書店経営における陳列の方法など、多岐にわたる内容について講演いただき、学生のみならず参加者の方々にも多いに参考になる内容であった。

第二部：ワークショップの実施

第二部では、グループ分けされた 10 グループに分かれ、①とやま呉西圏域の文化の強みについて、②図書館から地域活性化を考える、をテーマに議論した。

各グループには公共図書館の現状を知る勤務者が必ずいるようにグループ編成をした。学生は事前に、該当図書館の下見や課題と思われる点を調査し、ワークショップではその実態も含め、確認作業も同時に行った。日常的に公共図書館を利用する学生や、全く利用しない学生を混合することにより、多角的な視点、かつ新たな視点で公共図書館の在り方を提案するとともに、公共図書館の実態を理解する場ともなった。また、デザイナーをはじめとする、図書館関係者ではない、各分野の専門家等にグループに参加していただくことにより、学生の提案に対し、図書館勤務者との１対１の議論ではなく、提案に対する別の視点からのアドバイスを提示していただくことにより、提案内容の実現可能性の向上や、従来にはなかった新たなイノベーションの創出にもつながり、学生の提案拡大のみならず、図書館勤務者の方にとっても新たな視点による業務改善のヒントにつながるコメントもいただいた。

総括

10 グループの各グループで議論した内容について、最後に発表した。発表・提案内容の詳細を分類したものが、表７に示したとおりである。主な提案事項としては、空間デザインの見直しが多く含まれ、具体的な実践としては、実現可能性も考慮したため大規模な改修費用等を必要とするものではなく、十分に実現可能性を有するものであった。また、公共交通機関との連携による読書推進のプロジェクトは斬新かつ実現可能性のある魅力ある提案であった。

表７　グループ発表・提案内容

	グループ構成	テーマ	提案項目	提案数
1	公認会計士、図書館勤務者、学生	図書館を地域文化の拠点とする	空間デザインの見直し、食文化の発信	8
2	デザイナー、高等学校司書、学生	本の管理方法の多様化	空間デザインの見直し、イベントの実施	2
3	古書店経営者、地域活動家、学生	図書館を地域情報の発信基地と位置付ける	図書館V－Tuber開設、SNSの積極的な活用	5
4	企業経営者、図書館OB、学生	図書館の機能拡充	交通機関（バス等）での本の設置、異業種（例：古本屋）とのイベントコラボ	7
5	民間書店勤務者、図書館勤務者、学生	図書館の機能拡充	空間デザインの見直し、食に関するイベントの実施	2
6	書店経営者、図書館勤務者、学生	図書館の抜本的な改革	異業種（例：水族館、運動施設等）とのコラボ、空間デザインの見直し、テーマによるイベント実施	7
7	デザイナー、図書館勤務者、学生	本を基点としたコミュニティの形成	本のレベルアップ制（共同データベースの構築）、本の選定見直し（住民参加型）、鉄道図書館の設置	7
8	雑誌編集長、図書館勤務者、学生	逆転の発想	宿泊できる図書館、寛ぐ図書館、音楽と本、空間デザインの見直し	7
9	地域住民、図書館勤務者、学生	図書館の機能拡充	小売店とのコラボ、時事対応（スポーツ、ゲーム等）、イベントの実施	5
10	美術館勤務者、大学教員、学生	図書館の在り方再検討	図書館に対する住民の意識改革、教育の再構築	3

なお、当日のトークセッションならびにワークショップの内容については、右記のとおり、富山新聞令和元年 11 月 24 日付朝刊にて記事としていただいた。

図書館通じた地域活性化探る

射水でワークショップ

富山短大経営情報学科の篠田隆行准教授と東野義明准教授は23日、図書館を通じた地域活性化を考えるワークショップを射水市ライザック小杉文化ホールで開き、学生と住民ら約60人が意見を交わした。

両准教授は40人ずつ意見を踏まえて地域活性化策をまとめ、周辺部6市に提案する。

図書館の新たな役割や地域での位置付けを考えるワークショップで、ブックディレクターの幡充考さんが全国の図書館の新たな取り組みを紹介。学生と住民らがグループに分かれて意見交換した。

学生らは「体験型の取り組みや、日本酒が飲める図書館がいい」「屋外でも読める空間や大人向けのスペースがほしい」などと提案した。両准教授はアンケートも行い、年度末までに提言をまとめる。

3.3　事例検証結果

3.3.1　文献調査並びに実地調査に基づき、図書館とは何かを考える。

一部の若者には、公共図書館が用意したものは役に立っていないのではないか。そのような意識は、図書館側にも多少なりともある[1]と考えられる。そこで、そもそも図書館がどういうものであるかを振り返っておく。ここでは海外の事例ではあるが、『炎の中の図書館 110 万冊を焼いた大火』に描かれているロサンゼルス中央図書館を例とする。

(1) 図書館はどういう人が使うのか

学者たち、暇つぶしの連中、読書好きたち、好奇心にあふれた人々と退屈した人々。　『炎の中の図書館』(2019) 13p

公共ゆえに利用者は多種多様である。新聞を読む高齢者、調べ物をするビジネスマン、子どもの手を引いてお話し会に参加する母親、施設見学に来た小学生たち。特に注目すべきは、好奇心にあふれた人々と退屈した人々という両極端が存在する点である。共存を目指す施設ではあるが、その運営の困難さは並大抵ではないと容易に想像できる。

図書館としては若者対応に迫られている。こちらも一筋縄では行かない。残念ながら、ＹＡ（ヤングアダルト）世代に対しての本格的なサービスが児童サービス同様にスタートしていないように思われる。児童サービスは比較的充実しており、その担当者もなり手は多い。ＹＡ世代はその特徴として幸せだけを謳歌している訳ではないため、図書館側も対応に躊躇するのかも知れない。その世代に応じたテーマを挙げると、セクシュアリティ、自殺、薬物中毒、ギャング、家出といったプログラム[2]となり、用意する側にも覚悟がいる。

一方で、ＹＡ世代に対しては図書館がしつけと称して、公共施設でのマナー、特に飲食について教える事例[3]が見られる。図書館員にとっても、周りの大人にとっても、公共図書館であるからこそ、若者の逸脱した態度は納得できないのではないだろうか。その場合の単純

---

[1] 井上（2018）294p　そうは言っても不読率が高いと指摘されがちな 10 代である。公共図書館に来ない、来ても図書を借りてくれない、読んでくれない 10 代に図書館関係者の悩みはつきない。小学生のように毎月何冊も借りて読んでくれない。出版社や書店が売り上げを気にするように、図書館も借りてくれる数が気になるところだろう。

[2] オーリアン（2019）245p　グッドヒューの建物ができてから独立した児童書部門はあったが、1968 年までティーンエイジャー向けの部門はなかつた。12 歳から 19 歳までの年齢は人生における特別な時期だという概念が 1960 年代まで登場しなかったからだ。新たなティーン部門は本ばかりかフォークソング、柔道クラス、ロックコンサートなどのイベントも企画して、若い人々に図書館へ足を運んでもらい、ただの本の保管場所ではなく、コミュニティセンターのように感じてもらおうとして。しばらくすると、歌の集いはティーンの生活におけるもっと深刻な問題に取って代わられ、ティーン部門はセクシュアリティ、自殺、薬物中毒、ギャング、家出といったプログラムを扱うようになった。

[3] オーリアン（2019）248p　ティーン担当の司書は、司書の仕事だけでは終わらない。その部門の司書たちは非公式のアドバイス係であり、パートタイムのしつけ係であり、宿題の教師でもあった。親が自宅にほとんどいない多くの子供たちにとっては、親代わりだった。・・・ちょうど、そのとき、黒いアイライナーを上に跳ね上げるように引いた女の子が、チートスの袋を持ってデスクに近づいてきた。「本に触らなければ、ここで何か食べてもいいですよね？」彼女は心配そうにたずねた。マッコイは食べることは禁止されていると伝えた。少女はため息をつき、チートスの袋を軽く揺すりながら、漫画の棚に近づいていった。

な反応は、排除というパフォーマンスにつながる。

(2) 図書館で何を利用するのか

その日、彼らは200箱以上の地図を箱詰めし、その瞬間に、図書館の地図コレクションはこれまでの倍になった。　『炎の中の図書館』(2019) 193p

---

図書館資料は種類[4]も多様である。もちろん図書館にある資料は本だけではない。図書館員が「意識して」収集してきたとすれば、資料の種別は増えていく。当然ながら図書館員が意識しなければならないのは、利用者の質問に対してである。

ところが残念なことに利用者は図書館員に質問をするまで、求めている資料が図書館にあることに気づいていない。さらに残念なことに、利用者が欲しい資料（特に本以外）の有無を尋ねても、「ここの図書館にはありません」の一言で終わることもある。その場合、その資料が置かれることは永遠にない。質問イコール隠れた要求であることに気づいていないか、気づかない振りを図書館員はしている。

ひとつの例として地図について見てみよう。亡きジョン・フェザーズ氏が所有していた地図のコレクション[5]を、不動産業者のグリーンバーグ氏が図書館司書のグレン・クリーサン氏（地図部門の責任者）に連絡したことがきっかけで図書館のコレクションとなった事例である。地図にはどのような種類があり、それをどのように入手し、どのような準備があれば利用に結びつくかが確認できる。

---

4 オーリアン（2019）14p　全員が『アイルランド人芸術家の辞書』や『1000の顔を持つ英雄』やリンカーンの電気や《ピザ・トゥデイ》誌や、『斬新な編み物の完全ガイド』や1960年代のサンフェルナンド・ヴァレーで撮られたスイカの写真や、いつだって人気のハリー・ポッターの本、その他もろもろの図書館に収蔵されている何百万という本やパンフレットや地図や楽譜や新聞や写真をめざす。彼らはまさに川の流れさながら、赤ちゃんの名づけ本、アイルランドの政治指導者チャールズ・パーネルの伝記、インディアナ州の地図へと流れていく。ロマンチックだが扇情的ではない小説はないかと、司書のアドバイスを求める人もいる。税金について調べる人もいれば、英語を教えてもらう人、映画を借りだす人、系図をたどる人もいる。

5 オーリアン（2019）193p　フェザーズは余暇に地図を集めていた。区画地図。絵地図。地形学的研究書。都市計画。ツアーガイド。ステート・ファームとランド・マクナリーとハグストロームによって出版されたロードマップ。スポーツマン用地図帳。進路要図。地質図。彼は最初に出版された４冊も含め、ほぼ完全な『トーマス・ガイド』を所有していたし、『トーマス・ガイド』のライバル『レニー・アトラス』もほぼ全巻揃えていた。ふつうの地図も持っていた。とりわけ１８９１年と１９０３年の特別な地図帳。１５９２年に出版されたヨーロッパの地図。・・・２０１２年、フェザーズは５６歳で亡くなった。・・・コテージはまさに破裂しそうだった。隙間という隙間にはフェザーズの地図が押し込められ、床に山と積み上げられ、大量のファイルボックスに保管され、キッチンの戸棚やオーブンの中にまで積み重ねられていた。ステレオは『トーマス・ガイド』を入れるスペースを作るために中身がそっくり引き出されていた。グリーンバーグはこれをどうしたらいいか途方に暮れたし、この地図ががらくたなのか価値があるのかもわからなかった。それでも、ゴミ収集トラックを呼ぶ気にはなれず、図書館に電話して、グレン・クリーサンに連絡をとった。「こっちに見に来てください」グリーンバーグは頼んだ。

(3)　資料をどう準備し、並べるのか

フェザーズ・コレクションは量だけでも圧巻で、必要とされる棚はフットボール場ふたつ分に相当した。　『炎の中の図書館』(2019) 194-195p

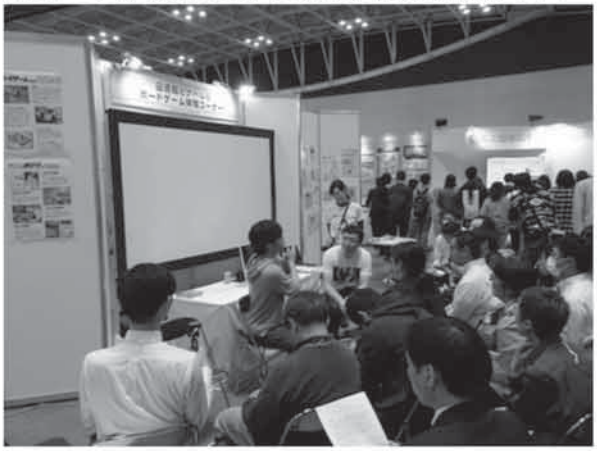
本だけを見ても、そのジャンルは様々である。図書館初心者から研究者までが利用しやすい並べ方は今のままでよいのだろうか。全国各地の公共図書館でも模索は続いている。

困難さの背景として、本以外の紙資料も整理するためには、時間も人も必要である点が挙げられる。さきほどのフェザーズ氏の地図コレクションを事例として考えてみる。地図には、その名前と描かれている都市名だけでなく、大きさ、発行場所、印刷会社名などの特徴がある。それらを元にして分類し、膨大な地図の中から利用しやすいために「索引」を作る必要がある。

(4)　図書館に必要な機能とは何か

子どもたちが〈ティーン・スケープ〉にやって来るのは、無料のプリンターを使ったり、たんに親のいないところで過ごすためだ。この部門には3万冊の本、何十というボードゲーム、最新版のビデオゲーム、〈ギター・ヒーロー〉があった。
『炎の中の図書館』(2019) 248p

図書館員はＰＲ力を鍛える必要がある。肝心な点は、使い方の応用は無限大であることである。図書館と若者をつなげるためには、若者目線を心がけた使い方、機能をＰＲすべきであろう。そうすれば、これまでとは異なった印象を生み出すことができるに違いない。かつての図書館は、コンピュータが利用できるだけで若者世代が集った。今は多くの家庭にコンピュータがあるだけでなく、個人個人がスマートフォンを利用してネット社会とつながりを持つ時代である。その事実を踏まえて、もう一歩進んだ図書館の機能を考えていくべきだろう。



図書館とゲームは、アナログ・デジタルを問わず、特に若者世代との相性は良いと考えられている。第 20 回図書館総合展（2019 年 11 月 12 日～14 日、パシフィコ横浜）においても、ブース「図書館とゲーム」の担当者が挙げていたのは次のとおり

である。

①原作や戦国武将などのモチーフをより詳しく知るため読書推進につながる
②中学生から 20 代まで人気があるためティーンズ層へのアプローチができる
③普段に図書館との接点が無い新規来館者の開拓ができる
④ＶＲ（仮想現実）などの最新技術を体験する場となる

これらを題材とすれば、ＰＲ、すなわち関係性をつなぐために、はじめの第一歩を踏み出せるのではないだろうか。

3.3.2　実地調査に基づき、若い世代の未来のために図書館がやるべきことを考える。

(1)　準備すること

図書館は社会に元々あるコワーキングスペースだと考え、無料というあきらかな利点に目をつける者も出てきた。　　『炎の中の図書館』(2019) 342p

---

図書館の生き残りをかけた切り札として、次の２点を挙げておく。１点目は、コワーキングスペース[6]の設置である。かつてのビジネスマンはオフィスの机で仕事をするのが常識だった。今はオフィスの外を含めて、居心地の良い空間や広いテーブルのある環境をワーキングスペースに求める傾向にある。ライバルは他の図書館ではなく、ファーストフード店やコーヒーショップである。

---

[6] オーリアン（2019）342p
図書館は旧式だが、最近、30 歳以下の人々のあいだで人気が高く、若い世代の方が年配者よりも頻繁に図書館を利用している。ストリーミング配信されるデジタル化された世界で育っているにもかかわらず、若者の 3 分の 2 近くが、図書館にはインターネットでは利用できない重要な資料があると考えている。年配の世代とはちがい、30 歳以下の人々はオフィスで仕事をする可能性が少なくなってきた。その結果、家の外で仕事をする際に、居心地のいい場所を常に探し、多くはコーヒーショップやホテルのロビーに落ち着いたり、ブームになっているコワーキングスペースに加わったりしているようだ。図書館は社会に元々あるコワーキングスペースだと考え、無料というあきらかな利点に目をつける者も出てきた。

将来的には、わたしたちが本を借りるのは〈オーバードライブ〉からになるだろう。となると、図書館は町の広場のような存在になるのかしれない。　『炎の中の図書館』(2019) 354p

２点目として、電子書籍提供企業の大手オーバードライブ社[7]の例をあげる。アメリカのオハイオ州に本社があり、世界 75 ヵ国以上、4 万 3 千館の図書館で利用されている実績を持つ。日本においては楽天オーバードライブ社[8]がサービスを提供している。オーバードライブ社の例は、図書館の未来について示唆に富む内容を含んでいることが分かる。あくまでも、本の貸出の未来であって図書館の未来ではない。認識を広げた上で、両者を区別し、考えるようにすべきである。区別していないとすれば、図書館には本しかないと言っているのに等しい。

(2)　トライアンドエラーの精神

時には、将来に必要なものを今から準備する必要がある。トライアンドエラーの精神である。例えば次のような例[9]は参考になる。

図書館を拠点とするハイスクール・プログラムで、図書館のウェブサイトを通して・・・900 ある COHS のクラスの中からどれでも無料で受講でき・・・ハイスクール卒業証書そのものをもらえる。　『炎の中の図書館』(2019) 95-96p

さらに日本の公共図書館には今はない。あるいは不十分な状態である事例もある。ここで

---

7 第 3 回地方創生ＥＸＰＯ（2020 年 2 月 5 日～7 日、幕張メッセ）において、担当者からの聞き取りをした内容を加味している。

8 オーリアン（2019）354p　〈オーバードライブ〉本社ロビーは広々としていて天井が高かった。3 メートル四方のスクリーンに、ロビーを中心にした世界地図が表示されている。数秒ごとに、地図のどこかであぶくが浮かび上がり、図書館の名前とそこで借りられた本の題名が表示された。スクリーンを見ていると頭がくらくらしてきた。数分もそこに立っていたら、フランスのアルルの小さな図書館で誰かがギョーム・ミュッソの『今の瞬間』を借りたところが浮かぶだろう。そしてコロラド州ボルダーではＪ・Ｋ・ローリングの『ハリー・ポッターと呪いの子』が、メキシコシティではグアダルペ・ネトルの『わたしの生まれた体』が借りられた光景が脳裏をよぎる。あたかもリアルタイムで世界の思考地図を眺めているかのようだ。

9 オーリアン（2019）95-96p　2014 年、サーボはキャリア・オンライン・ハイスクールを設立した。アメリカで初めて認可された、図書館を拠点とするハイスクール・プログラムで、図書館のウェブサイトを通して、ハイスクールの卒業証書をもらっていない大人が 900 ある COHS のクラスの中からどれでも無料で受講でき、ハイスクール卒業同等資格ではなく、ハイスクール卒業証書そのものをもらえるというものだ。日頃から、図書館は市民の大学だという信条についてサーボは熱く語っていた。COHS によって、彼はその理念をついに実現できたのだ。これは図書館にふさわしい、うってつけのアイディアだったので、サーボが手がけてから、ロサンゼルスのプログラムに刺激を受けた 50 の全国の図書館が、それぞれの大人のハイスクール・プログラムを始めた。

は外国人とホームレスへの対応を紹介するにとどめる。

外国人のための識字センター

今ではフランス、ロシア、ベネズエラ、ブラジル、チリ出身の生徒たちを指導している。ガラパゴス出身の生徒までいる。電話の請求書、学校からの通知、税金関係の申告書が理解できるように手を貸し、読み方を知らない人々には個人的な手紙を読んであげ、返事を書くのを手伝うこともある。メキシコで生まれたがロサンゼルスで育ち、アメリカの市民権を手に入れたがっているヴィクターという青年には、週2時間、指導をしていた。

『炎の中の図書館』(2019) 224p

ホームレスの広場

たくさんのホームレスの人々とすれちがった。掲載した写真のうち1枚はホームレスの人々がひとつのテーブルにすわっている光景だ。何をするでもなく静かに過ごしていて、周囲に迷惑をかけているわけでもなかったが、そこだけ空気が重苦しくなっている気がするのは否めなかった。本書でたびたび記されているように、図書館はホームレス問題を避けては通れなくなっている。日本でも、いずれそうなるかもしれない。

『炎の中の図書館』(2019) 379p

4. まとめ（提言）

4.1 図書館員への提言

図書館員は図書館とどこがコラボすることを目指すのか

図書館員はプロフェッショナルであることを目指すべきである。本当のプロフェッショナルとは「他のプロとうまく共同作業できる人のことであり、彼／彼女らにじぶんがやろうとしていることの大事さを、そしておもしろさを、きちんと伝えられる人であり、そのために他のプロの発言にもきちんと耳を傾けることのできる人だ」[10]と言える。やはり一つのこ

---

[10] 鷲田（2018）168p

としかできないのは、プロフェッショナルではなく、「スペシャリスト」であるにすぎないのである。

4.2　司書は図書館資料の番人か

図書館が単独で生き残ることが可能であれば、図書館員はプロフェッショナルである必要性はない。これまでも、「図書館が一体何の役に立つのか」[11]は常に問われ続けてきた。その問いには、「利用している人だけに有益であれば良いのか」、「来館するだけで活用していなくても良いのか」といった点を含んでいる。今後は、他の組織とコラボレーションすることで、問いの答えを模索し、提示し続けることも重要な施策となり得る。

一方で、図書館の利用者については、嶋田[12]が言うような点も指摘しておく。

「客」という言葉には、「訪れる人」「招かれる人」という意味以外に「料金を払う利用者」という意味がある。言い換えれば「消費者」ということになる。図書館に「訪れる人」を客としてもてなすホスピタリティーは大切である。しかし、住民は同時に地方自治では「自治の担い手」であり、地方政府そして日本国の主権者である。決して「お客様」ではなく「当事者」であり、図書館行政についても、主権者としてその政策に関わりをもつ権利と義務をもっている。

『図書館・まち育て・デモクラシー』(2019) 168p

また、自らの機能を外部にアピールしないという図書館の内向的な姿勢への危惧[13]はある。

さらに言えば、まちにあるショップを参考にすることは必須ではないだろうか。山重[14]が言うように「基本的に、図書館は役所よりもお店に近い存在である。お店のサービスに近い仕事をした方がはるかに効率良く進む。良いお店の例は、悪い店の例と同じく、世間にたくさんあるのだから、それをもっと学べばいいだけの話だ。」という示唆は参考になる。やたらと文書・書類を利用者に書かせる図書館は、今後無くしていく必要がある。

11　上畠（2020）8p　履歴書の趣味の欄。あれほど困るものはありません。自称真面目な文系大学生として、忙しいながらもオモシロ楽しく過ごした大学に別れを告げ、社会の荒波に漕ぎ出さんとする就職活動の時期。就活セミナーの講師の方に言われました。趣味の欄は、悩んだら読書と書いておきなさい、と。なるほど読書は無難な趣味のようです。・・・私にとって読書とは、行き止まりの趣味です。私の読書がもたらす効果なんてたった一つ。私が楽しくなる、それだけです。愉快で利己的な趣味、読書万歳。

12　嶋田（2019）168p　「お客様」という呼称と「消費者民主主義」

13　嶋田（2019）195p

14　山重（2020）61p
基本的に、図書館は役所よりもお店に近い存在である。お店のサービスに近い仕事をした方がはるかに効率良く進む。良いお店の例は、悪い店の例と同じく、世間にたくさんあるのだから、それをもっと学べばいいだけの話だ。そして、実際に自分が、いろいろなお店を利用していて、いい店だと感じるところは、客に面倒だなと感じさせないところだ。また、仮に、面倒くさいお店があるにしても、そういうお店は、客の細かい希望にいろいろ添えるように選択肢をたくさん用意しているところだ（サブウェイのトッピングのようなものだ）。選択肢が豊富にあるわけでもないのに、ただ面倒くさいだけなのであれば、それは、当然、クレームにつながりやすい。

4.3　高等教育機関と組むことで活性化する

筆者が学生と地域に出かける理由は、所属する学科の目標に忠実なためである。

経営情報学科では、地域社会の発展に貢献する人材を育てています。

今はどこの高等教育機関も地域貢献[15]に取り組んでいる。地域にしても、教育にしても、成果はすぐに見えない[16]からこそ協働する意義はある。また、「地域は変えられないけど、学生の地域を見る目は、変えられる」という信念[17]を持ち続け、継続的な活動に取り組んでいく。高等教育機関、ならびにそこに従事する研究者は、地域社会に対し様々な観点から還元すべき責務を担っている。また、学生という大きな財産があり、彼らとともに積極的に社会と関わることで大きな力となることを確信している。ソーシャルデザインの構築にあたっては、時間を要するものの、この若い力と協働することではじめて有益かつ実現可能性を有する活性化に繋がるものなのである。

4.4　最後に

2020 年 2 月 11 日付の日本経済新聞で、近年の全国の公共図書館の機能が変貌していることが報じられている。地域活性化の策として、起業が支援されているなか、そのビジネス支援の機能を公共図書館が備えているのが都道府県立図書館のほぼすべて、市区町村立の約 4 割に達するとのことである。また、薬袋（2018）によれば、今後の日本社会の発展のためには、社会人の「学習や調査」のための利用が重要であり、そこで図書館について最も必要なこととして、「市民に、図書館は生活や仕事に関する学習や調査に役に立つ場所であることを知らせ、利用することを勧めるべきである」ことを指摘している。加えて、地方自治体の財政事情の悪化の中で図書館と社会や行政の環境との間に衝突が生じている点を指摘している。そして、図書館関係者が要望を述べる一方で、利用者・市民や行政関係者ならびに文芸出版社・作家との間で十分な議論や対話が行われていないことを指摘している。市民に対する後方は決定的に不足しており、意見の裏付けとなる資料や議論も不十分であり、よ

---

15 例えば、相模女子大学（神奈川県相模原市）は、雑誌「日経グローカル」の調べによると、大学地域貢献度ランキング全国女子大学連続第 1 位（2011～2017 年）を獲得している。

16 青木（2019）52p　以前の職場（学校法人）で先生が、「教員として学びの種はいろいろ蒔くけれど、何が発芽するかは学生次第で、予想はできない」とおっしゃったことがありました。「図書館で本を手にとってもらえるかどうか」も、そこに似ている気がします。館内に特集棚を作ったときも、「手にとってもらえるように、明るくわかりやすい雰囲気のものを。マニアックな本は避ける」などとゴチャゴチャ考えたけど、結局、全然意図していない本に意外な関心が集まったり、むしろ奥深い本を学生から教えてもらったりしたものでした。
人それぞれ、何かに惹かれるトリガーがあります。入口が閉じたり開いたりするような、秘密めいた「わかりにくさ」が気になって、引き寄せられる人もいるんじゃないかしら。

17 Writes（2019）21p

りわかりやすく、詳しい議論が必要であるとともに、図書館関係者の対応能力にまで懸念を示している。

本研究では、呉西圏域に限らない全国的な公共図書館の課題を踏まえつつ、富山県呉西圏域の公共図書館の新たなイノベーションの創造を図るべく実践的な取組を行った。結果としては、呉西圏域の公共図書館が抱える課題の背景は全国的な課題と共通していることが判明する一方で、デザイン・ディスコースの実践として、図書館関係者のみならず、それまで直接的に図書館に関わらなかったような人間や住民と対話することで、新たな取組の可能性があることは判明した。そして、この実践が更なる成果に繋がるためには、ソーシャルデザインの鉄則である、持続的かつ長期的な市民との対話による改善が必要であることが明らかとなった。

ソーシャルデザインを構築するうえで、長期的なビジョンを形成するためには若年層（大学生や短大生）の意見を積極的に聴く耳を持つ必要があることに加え、彼らの参画、理解を促す制度設計が重要である。しかし、本研究の調査結果からも明らかになったように、必ずしも若者の地域づくりへの参画意識が高いとは言えない現状において、今後も調査・研究を継続していくとともに、公共図書館に限らず、様々な焦点を提示し、若者が呉西圏域における地域の魅力を再認識できるよう機会の提供、ならびに研究の深化を図ることで地域活性化という実のある成果に結び付けたいと考える。

【参考文献】

・青木真兵、2019、『彼岸の図書館』、夕書房。

・アーリック・ボーザー、2018、『Learn Better』、英治出版。

・内田達也・本山拓人・井上航、2018、「デザインと経済学：ソーシャルデザインの実践から」『Aoyama Journal of international studies(5)』145-161 頁。

・岡安麗奈、2019、「地域における社会資本の機能と役割　－日本の公共図書館を対象とした実証分析―」、『青山社会科学紀要第 47 巻 2 号』、19-45 頁。

・筧裕介、2019、『持続可能な地域のつくり方』、英治出版。

・片山善博、2020、「真の地方創生と公共図書館の役割」、地方創生 EXPO2020。

・桑原芳哉、2018、「公立図書館の指定管理者制度導入状況：近年の動向」、『尚絅大学研究紀要』人文・社会科学編　第 50 号、31-44 頁。

・佐藤聡子・佐藤翔、2019、「公立図書館への指定管理者制度導入時・導入後の運営に地方公共団体関係者の認識が与える影響」、『同志社図書館情報学　第 29 号』、61-86 頁。

・嶋田学、2019、『図書館・まち育て・デモクラシー』、青弓社。

・スーザン・オーリアン、2019、『炎の中の図書館　110 万冊を焼いた大火』、早川書房。

・全国大学生活協同組合連合会、2019、『第 54 回　学生生活実態調査の概要報告』。
・富山県、2018、「新世紀とやま文化振興計画」。
・日本経済新聞、2020、「サードプレイス経済－３－」、２月 11 日付。
・平野友規・須永剛司、2016、「地域コミュニティを対象としたソーシャルデザインの実践」『デザイン学研究 2016』。
・松田安光・徳田光弘編、2017、『世界の地方創生』、学芸出版社。
・松村一志、2018、「変貌する公共図書館―東京都基礎自治体の事例から―」、『相関社会科学』28 号、65-70 頁。
・薬袋秀樹、(2018)、「日本の公共図書館の現在と未来：明日の社会の発展へ向けて」、『三田評論 1224 巻』、32-37 頁。
・文部科学省、2006、「これからの図書館像―地域を支える情報拠点を目指して―（報告）」。
・由田徹・永井由佳里・中嶋太一、2014、「建築における木材リサイクルシステムのデザインに関する研究」『デザイン学研究 2014』。
・鷲田清一、2018、「トランス・サイエンスの時代」、『ちくま科学評論選』、筑摩書房。
・Robert Verganti、2017、『突破するデザイン』、日経 BP 社。
・Robert Verganti、2016、『デザイン・ドリブン・イノベーション』、クロスメディア・パブリッシング。
・Writes Publishing 編、2019、『ずっと読みたい０才から 100 才の広告コピー』、ライツ社。

【謝辞】
本研究は令和元年度とやま呉西圏域調査研究事業補助金（「とやま呉西圏域における『とやま文化』の再定義とデザイン・ドリブン・イノベーションの実践的調査研究」、研究代表者：篠田隆行、研究共同者：東野善男）による研究成果である。
また、調査研究の実践となったワークショップの実施にあたり、オブザーバーとして参加していただいた方々には、幅広い知見と見識、ならびに多くの助言・発案を戴いたことに改めて深謝の意を表します。

「とやま呉西圏域における『とやま文化』の再定義とデザイン・ドリブン・
イノベーションの実践的調査研究」報告書

発行：令和２年３月 16 日
作成：篠田隆行・東野善男（富山短期大学　経営情報学科）
印刷：株式会社タニグチ印刷